

## パラリンピック意識向上プログラム

### 1. はじめに

国際パラリンピック委員会(IPC)は、初心者からエリートカテゴリーまで障害をもつ全てのスポーツ選手を Paralympic Athlete とし、その発展を目指すことが IPC の活動の中心であるとしている。また、パラリンピック大会以外の場でも成果を生じさせ、障害のある全ての人々にとって、よりよい世界を築くための貢献を行うことを目指し、これらを成し遂げるために、外部機関と連携しパラリンピック・ムーブメントを促進することが非常に重要であるとしている。

ソチ 2014 組織委員会およびロシア政府が 2014 ソチパラリンピック大会に向けて動き出したのは、2014 ソチパラリンピック大会開催の 4 年以上前である。バリアフリー環境の整備や選手の入出国に関する手続きなど、よりスムーズに 2014 ソチパラリンピック大会を運営する上での具体的な対策、パラリンピック大会の競技やパラリンピック・バリュー、障害者に関する理解を促す取り組み、及びそれらを可能にする法整備などが、2010 年のバンクーバー大会の開催より以前から進められてきた。こうした取り組みは、上述したような IPC の理念を踏まえて行われている。ソチ 2014 組織委員会およびロシア政府は、初の冬季オリンピック・パラリンピックの開催をきっかけにして、パラリンピック大会や競技種目、パラリンピック・バリューに関する国民の理解、それを通じての障害者理解、バリアフリー環境やユニバーサルデザインの普及を、ソチや首都モスクワを中心に、ロシア全土に波及させていくという狙いをもっている。

以下に、2014 ソチパラリンピック大会に向けて、ソチ 2014 組織委員会およびロシア政府が行った様々な取り組みの中で、「paralympic awareness program」について概説する。

### 2. paralympic awareness program

#### (1)「Sochi 2014 "Our Champion" project」

ロシアでは、2014 ソチパラリンピック大会に向けて、パラリンピック・バリューの理解を促進し、パラリンピアンに関する情報を周知することを主な目的として、パラリンピアンによる「Sochi 2014 "Our Champion" project」という取り組みが 2011 年から 2013 年の年末にかけて、ロシアの全連邦管区の教育機関で実施された。この取り組みは、講師であるパラリンピアンが、困難な状況をどのように克服し、国内大会や国際大会でどのようにして素晴らしい成績を残したのかということについてだけでなく、2014 ソチパラリンピック大会や競技種目、パラリンピック・バリューについて、子どもたち及びその保護者の理解を促し、パラリンピックへの関心を持つきっかけをつくった。

また、「Sochi 2014 "Our Champion" project」では、パラリンピアンやパラリンピック大会や競技種目、

パラリンピック・バリューに関する理解を一つのきっかけにして、ロシア国内の障害者理解や社会的インテグレーションを促進することを目指した。モスクワで行われた「Sochi 2014 "Our Champion" project」最初の授業で講師を務めたクロスカントリースキーとバイアスロンの選手である Ivan Goncharov 選手は、ソチ 2014 組織委員会のプレスリリース(2013 年 5 月)の中で、「チケット販売が始まる秋口(2013 年)、そして、パラリンピックの冬季大会まで時間はほとんどないので、パラリンピックに関してもっと理解を深め、人々がパラリンピックを観戦しようとするのは非常に重要だ。」と述べ、選手にとってベストの状態で行うために観客による熱烈な応援が必要であり、その前提として、パラリンピック大会や競技種目、パラリンピック・バリューについて人々に周知することが重要であることを強調した。

このような取り組みの成果もあり、現地で観戦したクロスカントリーの会場には、ロシア人を中心に多くの観客が詰めかけていた。また、他の多くの競技に関してもチケットが完売しているという状況であった。その他、会場内での取り組みとして、パラリンピック種目の体験コーナーが設けられており、こちらも行列ができるほど人気のイベントとなっていた。(写真 1、2、3)



写真 1:「Try out Paralympic !」の案内板



写真 2:チェアスキーの体験



写真 3:バイアスロン(伏射)の体験

## (2)「1000 days to go」「1000 Days to Paralympics」

2014 ソチパラリンピック大会の 1000 日前に「1000 days to go」「1000 Days to Paralympics」という一連のイベントが始まった。このイベントは、上述した「Sochi 2014 "Our Champion" project」と同様に、取り組みを通してロシア人やロシア社会全体の障害者に対する姿勢・態度を変えていこうというものである。「1000 days to go」の式典は、ロシア国内の 14 の都市で開催された。Tomsk, Moscow, Sochi, Omsk, Kazan では、障害のある子どもたちを対象に、Kazan State Technological University のボラ

ンティアがパラリンピックの歴史、パラリンピック・ムーブメントの価値、パラリンピック種目に関する講義を行い、フェスティバルの中核都市である Moscow では、ソチ 2014 文化的オリンピック大使のミュージカル劇団「Domisolka」が、脊椎損傷、小児麻痺の子どもと若者のためにチャリティー音楽会を開催し、パラリンピック大使の Olesya Vladykina は、パラリンピックの授業を行った。

こうした取り組みを通じて、パラリンピック大会や競技種目、パラリンピック・バリュー、障害者に対する理解を促し、2014 ソチパラリンピック大会本番では、25000 人のボランティアが空港で選手団の出迎えから閉会式のオーガナイズまで 20 を超える分野で活動する。また、講習や訓練を受けた 3000 人のボランティアが、選手たちの試合会場の移動支援を行っているという。視察のためにソチ空港に到着したのは深夜 1 時だったにも関わらず、空港には道案内などのボランティアスタッフが活動していた。また、ボランティアスタッフは空港などの主要施設や競技会場だけでなくソチ市内の至るところにおり、観客をサポートしよう、パラリンピック運営を支えようという熱意を感じた。

### 3. Accessibility Map

ソチ 2014 組織委員会は、①a world without barriers、② the development of a volunteer movement、③the implementation of «green» building standards、④the nation's adoption of Olympic values という 4 つのレガシーを発表した。この中で最も重要なレガシーは「a world without barriers」の発展だ。この観点で、障害者のニーズを考慮してスポーツ施設、道路、インフラといった、全てのオリンピック・パラリンピックに関する建築物が整備された。また、2011 年 5 月末には、ソチ 2014 「Accessibility Map」という革新的なプロジェクトが始められた。このプロジェクトのユニークな点は、障害者がパラリンピックを観戦スペースを見つけるサポートを目的に、karta@sochi2014.com. (karta はロシア語で「地図」の意味)というソチ 2014 組織委員会のオフィシャルのメールアドレスに寄せられた情報を基にしてパラリンピックのスポーツ施設や街のバリアフリーに関するロシアのマップを作るということである。会場でのボランティアのような直接の関わりだけでなく、バリアフリーに関する情報を提供するという間接的な関わりも含めて、ロシア人みんながパラリンピック・ムーブメントを支えるということが、障害者への態度を変容する一助となるのではないだろうか。

アルペンスキー、クロスカンリースキー、バイアスロンが行われるマウンテン・クラスタでは、車いす用のスロープが設置され、雪の影響のなるべくない状態で移動できるようになっているほか、車いすの観客が観戦しやすいように観戦スタンドの最前列に専用スペースを設けるなどの工夫がされており、「障害者がパラリンピックを観戦できるアクセス・ポイントを見つけるサポートとなること」という Accessibility Map の目的を意図した工夫がなされていた。(写真 4、5)



写真 4: クロスカントリー会場の車いす用スロープ



写真 5: 観戦スタンドの最前列にある障害者用の観戦スペース

アイススレッジホッケーや車いすカーリングが行われるオリンピックパークは、敷地が広大なため、シャトルバスが運行しており、車いす利用者はもちろん、多くの人々の移動手段として役立っていた。また、アイスホッケーの準決勝が行われたシャイバ・アリーナでは、車いす利用者が観戦しやすいように、導線や観戦スペースが工夫されていた。(写真 6、7)



写真 6: シャイバ・アリーナ内に入場するためのエレベーター

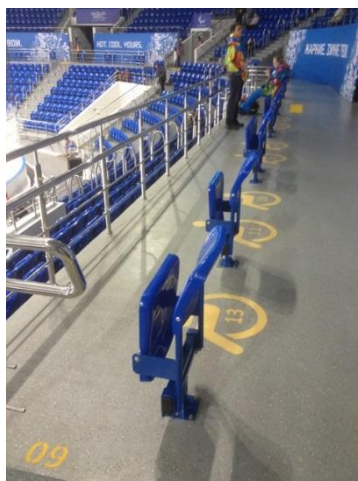


写真 7: エレベーターを降りた階層がそのまま車いす利用者の観戦スペースへと続いている。

また、大会の公式ホームページは、平易な文法表現を用いるなどの内容が理解しやすい工夫以外に、コントラストやフォントの変更、文字情報や視覚情報の音声情報への変換など、「Accessibility for people

with disabilities」の理念のもとに言語や障害などによって、情報の理解に差がでないような工夫がなされていた。

しかし一方で、街中でのバリアフリーの状況は、非常に優れているというわけではなく、むしろ障害者にとって利用しやすいとはいえない状況も見られた。ソチ 2014 組織委員会のプレスリリース(2012 年 5 月)で、IPC 委員長の Sir Philip Craven が、「ソチのバリアフリーの都市環境の多くは、既に IPC の高い世界標準に適合していることに本当に感動している。」と述べていたこともあったのでバリアフリーやユニバーサルデザインの状況を非常に期待していたが、例えば、障害者用のトイレは、日本で見られるような引き戸タイプではなく、普通のドアタイプのものしか見かけなかったが、これは車いす利用者にとって非常に入りにくい構造だと感じた。(写真 8、9)

また、ソチ市内のバリアフリーの状況についても、例えば、横断歩道の階段に備え付けられた車いす用のスロープのように実際には使いにくかったり危険だったりという理由で活用されてはいないものも見られ、プレスリリースで発表されているほどのものではないと感じた。(写真 10、11)

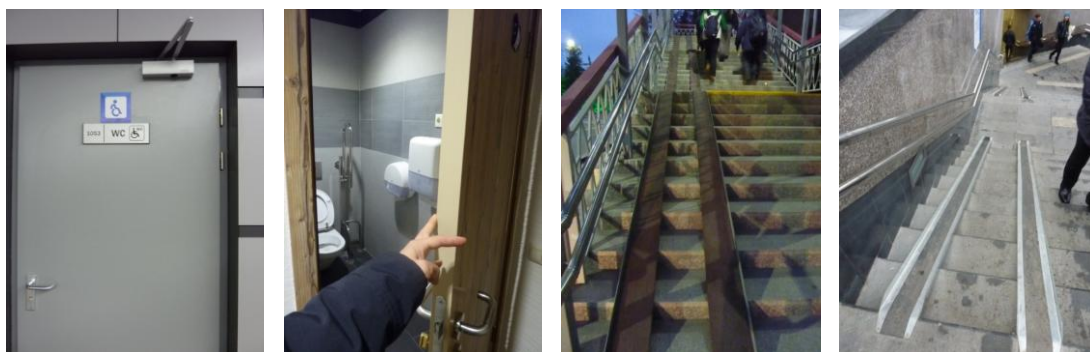


写真 8:ソチ空港の障害者用トイレのドア

写真 9:マウンテン・クラスタ会場の障害者用トイレのドア

写真 10:横断歩道に設置された車いす用のスロープ

写真 11:ソチ駅近くの車いす用のスロープ

ソチ 2014 組織委員会のプレスリリースと実際にソチでのボランティアスタッフをはじめとする人々の対応や競技会場の様子などを通じて、パラリンピック大会や競技種目、パラリンピック・バリューに関する国民の理解は非常に高まっているように感じた。この点は、開催地が決まってから **paralympic awareness program** に関して時間をかけて準備した1つの成果であると思われる。しかしながら、上述したようにバリアフリーやユニバーサルデザインの状況については、必ずしも利用しやすい状況ではなかったと感じた。東京でも、バリアフリーといいつながら障害者にとって利用しにくい施設・設備が多く見られる。2020 年に向けての都市デザインの中で改善していくことが必要だろう。

参考 Web page

<http://www.sochi2014.com/en/media/news/68712/>

<http://www.sochi2014.com/en/media/news/41892/>

<http://www.sochi2014.com/en/media/news/46019/>

<http://www.sochi2014.com/en/accessibility-for-people-with-disabilities>

文責・撮影:花岡勇太(筑波大学附属桐ヶ丘特別支援学校)